

秋山光和君の「平安時代世俗画の研究」に対する授賞審査要旨

六

秋山光和君は、東京帝国大学において美術史を学び、とくに研究対象を「やまと絵」に集注し、昭和十六年同大学卒業に際して提出した論文も「藤原時代やまと絵の研究」であつた。その後当時の美術研究所、現在の東京国立文化財研究所に入所し、爾来二十余年、現在、東京大学助教授の職にあり、引きつづき平安時代の世俗画の研究に従事し、すでに多数の論稿を発表しているが、今回それらの研究を、新たな知見の下に整理し、さらに新研究を加えて、この大冊を成した。

そもそも日本文化史上の平安時代は、初期以来の大陸文化移入がようやく静まり、わが国独自の文化意識に目ざめ、諸方面において固有の創造が始まつたが、美術とくに絵画の面において、古典的の美を形成し、日本的なるもの典型を作出した時代である。そうしてこれが究明は必ずしも容易でないが、秋山君はこの書において、豊富な知見を、世俗画存在の姿において記述し、その形成の過程を追求している。もとより千年の昔にさかのぼり、しばしば動乱をへて、遺存する作品は必ずしも多からず、その検討はまことに容易でなく、されば従来の研究はとかく停滞がちであつたが、秋山君の本著作は多年の努力の結晶とも見るべく、日本美術史上の一大寄与たるを失わない。ことに資料の実証的調査に、自然科学的方法を用いたことは、美術研究所の事業として種々効果を挙げ、同所の報告としてすでに「光学的方法による古美術の研究」の名の下に公刊されているが、これにも秋山君は主導的地位を占めていゝる。この資料により、絵画の材料に対する研究から作品の生成過程にいたるまで、実証的觀察を基として史的考察を

加えることをえた。これはかつてわが国美術史研究上多く用いられしことなき方法で、文献的研究と相応じて、わが美術研究上の画期的な仕事と認められる。

今本書の構想を見るに、本文四四九頁、図版九五葉、挿図一八一に及び、本文は序章の外三篇からなる。序章においては平安時代世俗画の展開を説き、その胎動、絵画と文学との交渉から世俗画の古典様式の成熟にいたり、さらに院政期における新しき展開に及ぶ。

第一篇「平安時代世俗画の文献的研究」においては、第一章の唐絵とやまと絵においてまずその用語の実例を挙げ、主題の対立や、画面の大小による差別等から両語の意義を論じ、両語が対立概念として限定された画面にのみ用いられたことを認め、平安時代の風景や風俗画の全般をさす場合、むしろ世俗画と呼ぶべきであるとしている。

また平安時代の文献に現われる絵具、技巧などにつき「すみかき」、「色彩構成」について考察し、とくに紫の重要性と其顔料について詳しく説くところがあり、ここではすでに文献から、実物に対する実証的研究が物言うこととなるが、これは次篇の遺品に対する研究において、最も効果を発することになる。

秋山君の本著の中心は、世俗画作品の基礎的研究(第二篇)にあるが、その第一章において教王護国寺藏唐櫃の人物画から始め第十一章の信貴山縁起絵巻に至る各章各一点ずつの作品を微細に追求し、X線、赤外線、紫外線、また顕微鏡等を用い、近代人の目に触れざりしものを現出し、制作過程を考え、あるいは補修改装等制作以来の運命を論じ、なお風景山水画の構成、人物の表現等を檢察し、製作の年代や事情、様式上の特質と絵画史上の位置づけや性格に及び、太子絵伝の絵解きの問題を論じては、次篇(第三篇)の変文絵解きの研究に進み、わが国の範囲を超えて遠

く西域の絵画に及ぶ。

八

以上平安時代における世俗画が、四百年間にいかに発生し、いかに発達したかを、文献、遺品、両方面からせめて、すこぶる精細に論究したことは現今の日本美術史学の現況から見て、一労作として推賞すべきである。